

油分測定計 セット

Water Analysis Set: Oil

型式：WA-OIL-S2

価格：98,000円(税別)

試薬類(20回分)、器具、油分測定計のセットです。

熱感性ポリマーであるポリニッパムの特性を利用し、排水基準値程度の水中油分を検水量わずか40mL、約15分で測定できます。

排水管理や水質事故時の現地調査等にご利用ください。

[特許 第4409915号]

※懸濁物が非常に多い検水(厨房排水原水等)では測定値が大幅に高くなります。このような検水では、まず公定法との相関を確認してください。

また、灯油等の揮発性油分や流動パラフィン等の無極性油分等を含む検水は測定できません。

包装外形 約410L×230W×195H mm
梱包重量 約2.3kg

本製品は、A重油・エンジンオイル(鉱物油)やサラダ油(植物油)等を標準物質としており、特にこれらを含む検水の現場でのスクリーニングとして威力を発揮します。油分測定計には、あらかじめ鉱物油・植物油の検量線が内蔵されているので、油分測定試薬セットで得た検液をセットするだけで、油分の濃度を測定できます。

試用品あります。
ご購入前の検討に。



内容

油分測定補充試薬(右頁参照) 1箱、
ビン 2本、温度計 1本、シリンジ 1本、ポリビーカー 2個、ブラシ 1本、
油分測定計 1台、専用カップ 5個

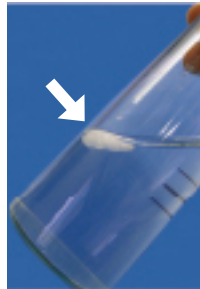
測り方の概要



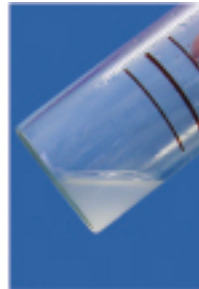
① サンプルング、試薬を順次添加、振とうします。



② 約70℃で加温、振とうします。



③ 油分を捕捉したポリニッパムが凝固します。



④ 検水をシリンジで吸引・除去後、凝固体を再溶解します。

お手持ちの分光光度計など

⑤ 660nmで吸光度測定し、使用方法記載の検量線から濃度を読み取ります。

油分測定計 または
デジタルバックテスト・マルチSP



⑤ 測定します。

	油分測定試薬セット	油分測定計/デジタルバックテスト・マルチSP
測定原理	ポリニッパム抽出物質測定法	透過光測定法
測定範囲	5~60mg/L	5.0~60.0mg/L(表示分解能0.5mg/L)
測定時間	約15分	0分(鉱物油・植物油の検量線内蔵)
測定回数	20回	—
検水量	約40mL	セル(専用カップ)1.5mL

油分測定 補充試薬

Water Analysis Reagent: Oil

型式：WA-OIL-R

価格：9,000円(税別)

試薬類(20回分)のセットです。

包装外形 約165L×110W×65H mm
梱包重量 約420g



内 容

R-1試薬 1本、R-2試薬 1本、R-3試薬 1本、R-4試薬 1本、
ポリピペット(3mL) 1本、ポリピペット(2mL) 1本、
スプーン 1本、スポイト 1本、ノズル 1本、使用法 1部

油分測定 試薬セット

Water Analysis Reagent Set: Oil

型式：WA-OIL

価格：18,000円(税別)

試薬類(20回分)、器具のセットです。

分光光度計などをお持ちで、油分測定計
が不要のお客様向けです。

※本製品は前処理セットです。

測定には分光光度計あるいは油分測定計
(型式:DPM2-OIL) 価格:80,000円(税別)、
デジタルパックテスト・マルチSP(型式:
DPM-MTSP) (p.21~24)が必要です。

包装外形 約410L×230W×195H mm
梱包重量 約1.8kg



内 容

油分測定補充試薬(上欄参照) 1箱、
ビン 2本、温度計 1本、シリンジ 1本、
ポリビーカー 2個、ブラシ 1本

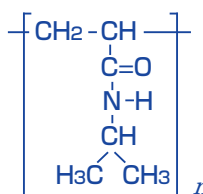
ポリニッパム抽出物質測定法とは

現在、食品工場等の排水中油分の測定では一般的に排水基準に係る検定方法付表4や、JIS K 0102 工場排水試験方法などの公定法で採用されていへキサン抽出物質測定法が用いられています。これらの方法では、検水を微酸性とし、へキサン抽出を行なった後、約80℃でへキサンを揮散させた時に残留する物質をへキサン抽出物質として測定し、水質汚濁防止法でこの値を油分とみなしています。一方、本製品では、熱感応性ポリマーであるポリイソプロピルアクリルアミド(ポリニッパム)の特性を利用した油分の測定方法を採用しています。

ポリニッパムを検水に添加して加温すると、油分を捕捉し凝集します。検水をシリンジで吸引除去後、凝集体を少量の水に溶解させることで、油分の水性懸濁液を得ることができ、これを透過光濁度を測定することで油分濃度を求めることができます。

この方法は東京薬科大学名誉教授の松原チヨ博士らとの共同研究により開発したものです。[特許取得済]

熱感応性ポリマー (ポリニッパム)



約30℃以下では液体、
約30℃以上では固体と
なり、水温を変化させる
ことで検水と分離できます。